

吉塚幼稚園ってどんな教育をする幼稚園？

園長 高杉美稚子

教育理念と目標を達成する為に、吉塚幼稚園の教育では三つの柱、三つの教育の根幹をなすものがあります。

吉塚幼稚園で目指す三つの柱

1に「**真の自立への道**」(個性と共感)

2に「**知ることの喜びを与えること**」(自己成長の継続と問題解決能力)

3に「**感動と思い出を作ること**」(生命の尊重と危機管理能力)

の三つが教育の根幹です。

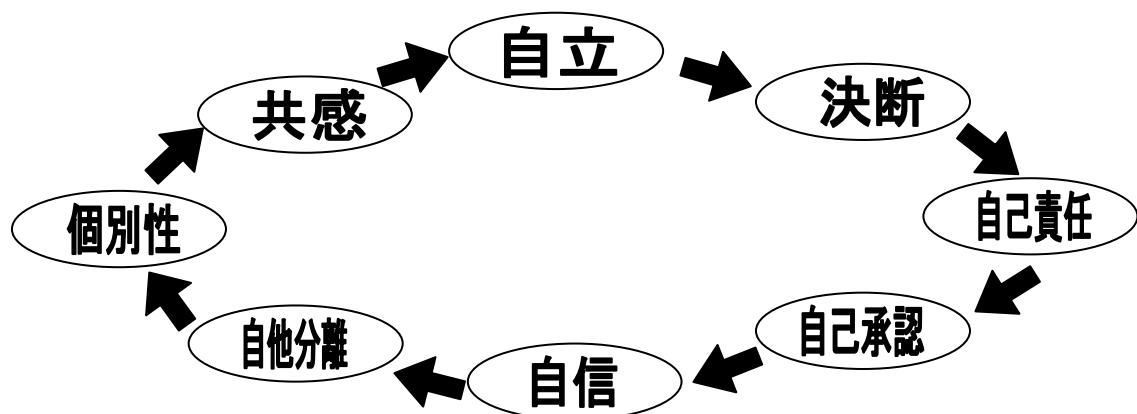
三つの教育

- 1、**共育**—自立への援助として、子どもと同じ目の高さになって、同じ純粋な心をもって、子どもを取り巻く教師が、保護者がともに育つ「共育」、
- 2、**響育**—感動と思い出を持って心と心が響きあう、子ども同士、大人同士、子どもと大人が、それぞれが問い掛けられたことがかえってくるそんな「響育」
- 3、**驚育**—知ることの喜びは、驚きと発見の連続を育てる「驚育」でありたいと考えます。私は、教育は決して「競争」や「狂育」「脅育」であってはならないと考えます。感性に裏付けられた知性こそが本当の知恵であって、ただの知識で終わってはならないのです。美しいものを美しいと思う純粋な心、あるがままの自分を認められる素直な心、自分と同じように他を認められる謙虚な心を大切に出来る人達になってほしいと願っています。

本園の教育のとらえ方

これから吉塚幼稚園で子どもに受けさせたい良い教育とは、「**自分が大好きで、自分が信じられる**」教育です。

その為には、大人の方が先ず自分の事を好きになって頂きたいのです。幼稚園の教育では「**自己選択→決断→承認→自信→自他分離→個性→共感→自立**」の教育の循環を通して、真に自立し、自分の事が大好きな子ども達を育てていきます。この教育は日々の保育だけでなく、子ども達が自ら選択、決定し、自己承認が出来る**自主選択保育「ドレミタイム」**や子ども達の感覚の鋭敏性、創造力、考える力、柔軟性、感性を培い、視野を広げる、遊びの自由広場「ガラスの塔」でのその年齢に不可欠の子ども達の望ましい成長と発達を促す教育にも繋がっています。

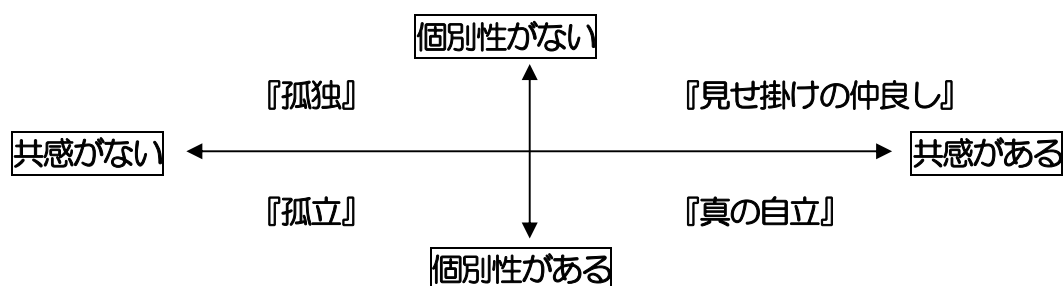


次に教育の柱の第一『自立』という点から考えてみますと

真に自立した子どもに育ってほしいという願いから子どもたちにとって一番身近である給食を選択制にしています。それは、なぜかを考えてみましょう。「皆、違ってそれでいい、貴方と私が違う事を認めていける」事が**自他の区別をつける(自他分離できる事が「個性がある」ということ)基本**です。そして、あなたがスキで入られる、あなたの存在を認めることが出来るのが『共感』です。お友達で個性がなく、共感があるのは、『ただの仲良し』です。個性がなくいつでも、何処でも、なんでも一緒の人が、違う行動をとると、共感がなくなり裏切られたと『孤独』に陥ります。あなたと私は違う

ことはわかっている共感が無い人は『孤立』します。

自他分離できて、個性があり、その上で共感があるところにはじめて『真の自立』があるのです。



他人と違うことをうらやましがったり、欲しがったり、認められないようでは、真の自立した人間には育ちません。持っているものも、人間としての魅力も違ってそれがよいのです。それが本当の個性です。個性を認めると、創造力も伸びます。個性が認められない人に育つといじめにも繋がります。自分とは違うものを認められないからいじめが起きるのです。又、個別化を認められないと、友達など周りの人間にふりまわされてしまい、自分自身に自信がなくなり、拳句に悩んで自殺をしてしまうと言う自体にもなるのです。自分に自信を持てると責任感が生まれます。このことは、生命の尊重にもつながっていきます。自他共に責任ある行動が出来るようになる為、これから子ども達が抱える課題は「**自他分離**」をし、「**共感できる**」という**真の自立をすることによって、解決する**と私は考えています。ですから、あえて、毎日の給食を選択性に行っているのです。家庭からのお弁当のおかずでも違っているのがあたりまえなのです。本園の園児は毎日の食生活の積み重ねの中から、自然にこの自立が芽生えているのです。吉塚幼稚園では、食教育一つをとってもこだわって手取り組んでいるのです。

第2の『知ることの喜びを与えること』という視点から

あらゆる体験を通した教育をします。教育内容はそのこと自体目的ではなく手段なのです。何が出来たかではなく「その子の育ちの姿の中でどれだけ伸びたか」が大切なのです。そして、その教育活動を通して、重要なことは広々とした運動場で基礎体力を養いながら基本動作を身につけ、いろいろな困難にあった時それを克服して自分の道を切り開いていく、たくましい精神力と持続力、人への思いやりとストレスをためない自己表現力を培うことです。

又、行事も前日までにその目的の99%を達成し、集団の中で育ち合うこと、心をつなげてチームワークが出来、協調性を身に付ける事が目的です。人と比較するのではなく、**個性や潜在能力は、実際にやってみる、自ら考えるという体験の場を踏む事によってしか伸びていけないのです。**だから、子どもの育ちの姿に即したプログラミングされた**体験教育→「体感教育」**が大切なのです。自らの体で感じる経験が、自分の肌感覚を大切にし、本当の自分の幸福を追求し、人に認められる為ではなく、自分の中の自分が自己を認められるようになる迄、自己成長続ける人に育っていくことにもなるわけです。そして、その中で、本当の問題解決能力や情報を取捨選択できる能力も育っていくのです。

第3の『感動と思い出を与えること』の視点から

感動ある教育を行う事は共感することに繋がります。なぜなら、感動する事は、『共感』した証だからです。「良かったね、最後まであきらめなかったね。嬉しかったよ」という小さな発見からの感動、そこにある共感こそが、1の「真の自立」の大切さにも、また繋がっていきます。感動のないところに人間としての自立はないのです。ですから、親子共に感動のある人になって頂きたいし、心に残る感動する体験教育が必要なのです。又、**私達大人の大切な仕事は、子ども達の心の陽だまりになる思い出の「原風景」をいくつ作ってあげられるか**にあります。そんな素敵な思い出がある子どもは、自分の命も人の命

も大切にします。この事が、まさに生命の尊重をし、危機管理能力のある子どもに育つ事の意味です。

どんなに良い教育がなされても、人や、自分の命を絶つような事があっては何の意味もありません。ですから、ビデオ通信や子どもの言葉を綴った『お話の宝石箱』などその思い出の記録作りにも力を注いでいます。

友達とのかかわりで大事にしたいこと

子ども達は『集団の中での育ち』を学びにきています。この中には小さなけんかがあります。これは、友達関係を築き上げる為に必要なかかわりです。心配するあまり、先に経験の芽をつんでいては、友達関係が築けなくなってしまう。人間は人間の間でしか生きていけない社会的動物です。子ども達は幼稚園で人とかかわりを学んで行きます。人間は一生無菌の状態では純粋培養とはいきません。人と人の間で生活していく事、その間で自分を認め、自分にとって何が大切か、自身の生き方の独自性を求める事が出来るように、自分を教育していく能力を培っていく事が大切と考えて教育をしています。

集団には「グループダイナミクス」と言う集団の教育力があります。親戚や友達が集まって、小さな子が何人かいる時のほうが、自分一人で子どもを見るより楽だなど感じた事があるでしょう。小さな集団にも教育力が発生しているのです。私達大人の役目は、集団の中で友達に認められ、励ましや、支えを受けつつ、精一杯自分の力を出し、1つつ自分の力として蓄えていく喜びを味わう体験、友達と生活を共有し互いに影響しあって、共に育ち会おうとする園生活を育んで行く添え木の役目です。

1、「私は私」という自分の存在の確立

人はまず、自分が大好きという自己肯定感を持つ事が教育の土台です。自分が大好きな子どもを育てることが出来たら、どんな困難も乗り越えていく人間に育つでしょう。自分を愛することが出来るようになる為に、ドリカムタイムや元気モリモリタイムをはじめ、本園では多くの**体験(体感)教育**をプログラムしてサポートしています。この体験を通して、**子ども達は、自分を認め、自己肯定感と自己有能感を持つことが出来るようになり、自分で自分を信じる事が出来るようになるのです。自分を愛することが出来れば、人を愛することが出来ます。自分を信じる事が出来れば、人を信じる事が出来ます。**そしてセルフコントロールができる自己決定能力のある子どもに育ちます。

2、「私とあなた」という二者の関係、共に生きるということ

自分が自分らしく、『私は私』であるためには必ず他者が必要です。子ども達は遊びを通して様々な事を学んでいきますが、遊びの中で自分だけ遊びを広げようと思ってもだめで、周りがこうしようと友達を自分の世界に入れていけないといけません。でも相手もまた主体性を持って遊び、人間関係の場にやってきます。そうすると自分のイメージと違う方向へ遊びや人間関係が行くこともあり、初めて自分の思い通りにはいかないということがわかり、争いを経験するのです。

自分の確立があって初めて、自分の考えや行きたい方向がわかり、自分の思い通りに行かない事もわかります。自分が確立されていない人間は、自分の目指す方向がわかりませんから、限りなく他者承認を求めます。

他者承認は、相手と時と場合によって変わりますから、それに合わせて承認を求め疲れ果て、自分は何を求めていたかわからなくなり、自分が透明な存在になっていき自殺に至るのです。けんかがあって、初めて相手にも考えがある事を知ります。**けんかがおきたということは、自分が確立したあかしで、人間の発達段階では最も喜ばしい成長**といえるのです。**どこまで自分を貫いて、相手も大切にしたらいいのだろう、「この程よさの概念」をこのけんかを通して学んでいくのです。**この両面を幼児期に乗り越えておこうというのが集団の教育であり、子育てなのです。

3. 皆の中の自分という存在

クラスの一員であるということが嬉しいという感覚を育てていくことが大切です。集団の中の一員であるという自覚を次第に持ち、集団の一員として振舞うことに喜びを感じるという面が子どもの中に芽生え、育てることが共に生きるという根本です。自ら、**皆と一緒にしていくと楽しいという思いに子どもが向かっていくようにすることが教育のエッセンスである**と考えます。ルールを守ったほうが、皆と一緒にのほうがもっと楽しく遊べるということに自ら気づくようにすることが大切です。そうすると周りとの連帯することが自分の喜びとなっていくのです。

大人は子どもの事を思うあまり、必要なつらい、苦しい、悲しい体験を先に先に摘み取ってしまいがちです。この思いを自分がすることによって相手の気持ちがわかり、ルールを守ることの大切さが理解できます。だから子ども達には、楽しい、やったと思える充実感のある成功体験と共に、つらい、苦しい、悲しい体験も同時に必要なのです。

そして、**結果だけではなくどんな体験もそのプロセスの中で楽しみ、気づき成長する人間に育てたい**のです。

吉塚幼稚園が考える心の教育とは

人は何も無いときはいい、でも何も無い人生はありません。自分に回りに何かあった時、何を感じ、どのように対応し、自己決断できる人間であるのか、後悔ではなく自分自身を向上させる反省を持って、自分と向き合い振り返る事が出来るのかやはり人間教育では大切です。結果が出たあとではこうすればよかったと思えることも、その時その時に判断していくのは本当に難しいことです。**結果がわからない時、自分の今の感情に気づき、その自分の心の声に正直に、小さな小さな決断を毎日、毎日、その時その時で重ねていくことこそ「本当の自己決断」**です。そうすると自分が信じられるようになってきます。その為には、保護者の方が先ず自分の事を好きになって頂きたいのです。誰しも完璧な大人ではありません。又、完璧な親に育てられたわけではありません。人間は皆、心に穴を抱えて生きて、どこか平坦ではなく、曲がりくねっているのかもしれません。だからこそ、生きている限り「心の教育」が必要なのだと思います。

『心の教育とは』ルールを教えるのではなく、なぜそうしないといけないかという気持ちを教える事ではないかと考えています。「片付けることが大切」という事を教える事が教育ではなく、片付けると気持ちが良いという気持ちを教えるのが心の教育です。この気持ちが理解できない限りしつけも子どもの心と体の中に定着することはありません。なぜそうしたほうが良いのかを子ども自身に感じてもらうことが心の教育です。「なぜ」を教えないとルールだけを守る人間になるのではないのでしょうか。『心』を教えないで社会のルールだけを教えると、その人は間違った努力をしてしまうことになります。

もし、子どもが、その事に気付かないで、ただ親や他人の承認を得ようとして言いつけを守るとすれば、その意味がわかっているのではなく、怒られるのが嫌だからしているのであって、理解しているのではないのです。

又、自分のことをわかってくれた時の、ほっとした体験をした時の気持ちが子どもの心を育てます、気持ちよいという心、感情、心地良さを育てる事によって心が育つのです。全ての教育は子どもが自分の心に躍動するものがなければなりません。そしてその気持ちをわかってくれた人の言う事を人はきくのです。大人でも自分の気持ちをわかってくれない人の言うことを聞けますか？子どもはもっと敏感です。そして、子どもが自分の気持ちに素直になり、かかわりの中心になった時に初めて心の教育が出来てくるのではないのでしょうか。先生や友達と心をひとつにすると気持ちがいいと感じること、子どもは親、教師や友達とかかわることで自分の存在を確認していきます。**園や家庭生活を通して、子どもは自分の心に修正を加えながら、「最後まであきらめない心、苦しくても悲しくても、つらくてもそれを乗り越えていく心」**を会得し、自分が自分であるというアイデンティティーを確立していくのです。それが「育てる」つまりは「自ら育つ」ということなのです。